

多言語化事業における校閲者の役割

方 国花・慶北大学校人文学術院

The Role of Copy-editors in Translation Projects

Fang Guohua • Institute of Humanities Studies, Kyungpook National University

多言語化事業／multilingualization 多言語表記／multilingual texts 専門用語／technical terms
校閲者／copy-editors

現在はコロナウイルスの影響で国家間の往来が難しくなっているのだが、コロナが終わったらかつてより唱えられていたグローバル化、ボーダーレス化というのは活性化し、多言語対応・多言語表記というのはより需要が増えると思われる。

その中で、奈良文化財研究所（以下、奈文研）の多言語化事業というのは、ニーズに合っていると見える。ただ、文化財についての用語は専門用語が多く、一般の人には親しまれていない場合が多い。文化財を総合的に研究するための機関となる奈文研にて、多言語化事業を立ち上げ、文化財についての知識をより広めようとする試みは素晴らしいものである。そのために、多言語表記というのは確かに有効的な手段と言えよう。しかし、なおより多くの来訪者・読者・視聴者を獲得するためには、どうすればいいのだろうか。私は日中韓訳の校閲者として、奈文研の多言語化事業に携わっており、これまでの経験を含め、この件について、自分の考えていることを少し述べたいと思う。

翻訳において専門用語をどう処理すべきか。私は日本の木簡研究をしており、木簡の専門用語について多少詳しいほうである。校閲をする中で、このような専門用語をどうしようかと悩んだことがある。木簡上の文字を消すために小刀などで表面を削り取ったものを、日本語では「削り屑」、中国語では「削衣」、韓国語では「削り屑」を漢字音で表記した「삭실 (sakseol)」、または「木簡の削り屑」を意識した「목간 부스러기 (mokgan buseureogi)」とする。私が悩んだのはこのような専門用語を使うべきかどうかである。なぜなら、論文の翻訳の場合なら全然悩む必要がなく、むしろ専門用語を使うべきだが、奈文研の多言語化事業においては、恐らく対象が一般の人であると考えられ、このような場合は分かりやすい表現を使ったほうがいいのではないかと思ったからである。

現在、各地域の市町村などでは掲示物やお知らせなどを多言語表記するとともに、「やさしい日本語」というのを広めている。それは、外国人が増えていくなか



木簡の削り屑

で、多くの外国からの住民にも内容を理解してもらうためには、多言語表記も当然大事であるが、訳者によって、または内容によっては、翻訳されたものは分かりにくい場合があるからである。むしろ簡単な日本語（＝やさしい日本語）で、分かりやすく説明してあったほうが分かるとの意見もある。また、これは外国からの地域住民が日本語・日本文化になじむ、あるいは習得するのにもつながる。

では、奈文研の場合はどうだろうか。多言語化事業が対象とするのは、奈文研ホームページの閲覧者、平城宮跡資料館の来訪者が主となる。これらの対象者の中には学者・研究者もいればそうでない一般の人もある。日本人もいれば、外国人もいる。また、大人もいれば、子どももいる。平城宮跡資料館の場合、ただ奈良を観光するためにきた外国人観光客もいる。さまざまな人に、奈文研の文化財を分かってもらうためには、専門用語の使用は必ずしもいいとは言えない。上記の例で言えば、中国人であれば「削衣」が何か分かるとは限らない。いいえ、むしろ、分からない人のほうが多いだろう。だからといって、専門用語の使用を全面廃止するのも文化財の知識を正しく伝えるうえで支障がありそう。そこで、私は、「やさしい日本語+専門用語」⇒「やさしい外国語+専門用語」がいいと思う。

やさしい日本語を使うことで、日本のより多くの方に分かってもらえる利点がある。それに専門用語も表記することで、専門的な知識を広め、より文化財を深

く理解するのにつながる。また、日本を訪ねる外国人も多少日本語ができる人が多いので、やさしい日本語であれば、元の言語で理解できたという満足感につながり、リピート率が増えるだろう。なお、やさしい外国語は、外国人だけが対象となるわけではない。外国語または外国の文化に興味を持つ日本人も案外外国語表記に興味を持ち、これで勉強をする人もいる。ということで、最終的には何といても翻訳の正確性である。

現在、世の中、多言語表記がありあふれており、形式上多言語になっているだけのところも少なくない。一般の公共施設は無論のこと、文化財関係のところも間違った翻訳が見られる。間違った翻訳のなかで、面白いミスばかり集めてSNSなどで投稿する人もいる。

しかし、奈文研の多言語化事業には専門の翻訳者（ネイティブ）が雇われている。また、私のような、文化財について少し詳しい人間が校閲をすることで、ミスリスクを減らしている。校閲者として多言語化事業に携わっている私は、恥をさらすようなミスをなくすだけでなく、より多くの人に理解してもらえる翻訳文にするのも私の役目だと考えている。